



Title	ハンガリーの映画監督ヤンチャー・ミクローシュの空間表象に関する研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	Levente, Molnar
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15117号
Issue Date	2022-06-30
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/86458">https://hdl.handle.net/2115/86458</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	doctoral thesis
File Information	Levente_Molnar_review.pdf, 審査の要旨



# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：モルナール・レヴェンテ

	主査 教授	応 雄
審査委員	副査 教授	中村 三春
	副査 准教授	浅沼 敬子

## 学位論文題名

ハンガリーの映画監督ヤンチャー・ミクローシュの空間表象に関する研究

### ・当該研究領域における本論文の研究成果

1960年代に独自の表現スタイルで世界各国の映画界に衝撃を与えたハンガリー映画作家ヤンチャー・ミクローシュに関する研究は、これまでは単発の作品評や論文が散見されるが、単著としてのヤンチャー研究書はいまだに見当たらない。30万字を超える分量を有する本論文はその作家性や芸術的特徴をめぐってまとまった論考を行なう初の試みであり、ヤンチャー映画に関するアカデミックな研究業績として該当分野の研究者から注目されるに違いない。

本論文はヤンチャー映画における空間表象を考察することに専念するが、その考察をミシェル・フーコーの「パノプティコン」をめぐり思考に結びつけて、独創的な研究アプローチのもとで同作家の空間構築を論究することに成功している。具体的な場面分析を行う作業を積み重ねたうえで、ヤンチャー作品の空間表象の諸特徴に「見られることなしにすべてを見渡す」という権力の行使のメカニズムを析出する興味深い映画論的発見は、本論文で展開された議論のなかで白眉をなすものであり、ハンガリー国内、または日本国内だけでなく、世界的な範囲で見ても研究の新規性を示す研究成果であるといえる。

また、本論文は、学術領域・分野からしても、映画評論、映画理論、歴史研究、社会・文化研究、哲学論考など幅広い。加えて、日本語、英語、ハンガリー語など複数言語にまたがる先行研究や関連文献を渉猟しており、とりわけ、ヤンチャー活動期のハンガリーで発行されていた映画雑誌などの貴重な一次的文献資料を調査・検討したうえでの説明と解釈が本論文の記述の信憑性を裏付けている。

上述諸点のほか、「カレッジ」運動やBBS撮影所といった、ヤンチャーの映画創作を取り巻く戦後ハンガリーの社会的文化的状況についての記述、また、ハンガリー国内におけるヤンチャー映画関連の先行研究や、ハンガリー出身で欧米の研究機関で活躍する研究者の研究業績についての整理・検討も、日本で触れることの少ない研究情報を豊富に提示しており、評価に値する。

### ・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会は、本学位申請論文が充実した研究成果を上げていると評価する。一方、本論文に残る問題点についても論文全体の構成から文章表現まで、具体的に指摘した。各作品論が5つの章でなされており、ヤンチャー自身や彼をとりまくハン

ガリーの状況についての解説と本研究の方法論に関する記述が序章と第1章で行なわれているが、後者が占める分量はやや多い。日本でヤンチョー映画の公開機会が少なかったことや、研究方法における斬新さといった事情で、本論文はそれらの事柄について多くの紙幅を割いたと思われるが、それらの事柄の一部を作品論に絡めて記述することで、記述そのものの効率性、および各章における分量の配分をよくする利点もより明快なカタチで得られたのではないかと感じられる。このことに関連して、論述の展開における一部の記述に文章表現の冗長さや重複が認められる。また、「空間」という概念が重要な本論文において、物語空間と映画空間という用語の混在も、より一層の定義づけを要請する。論文では「ヤンチョー／ヘルナーディ」という表記が幾度なく使用されているが、1960年代のヤンチョー作品の脚本を多く担当するヘルナーディ・ジュラについての説明は不足しているように思われる。さらには、「パノプティコン」をめぐる思考とヤンチョー作品の空間表象の考察を関連させるという論文のアプローチは示唆に富むものであるが、概念装置を作品に適用するといった側面をより弱め、具体的な作品から出発するという論考の方向性をより鮮明にすることによって、「パノプティコン」という理論的枠組みからはみでる映画的事象に関する検討も可能だったと考えられる。

審査委員会はこれらの問題点は主に、本論文の取り組む研究課題の新規性と、これまでの先行研究で見られなかった研究着想の斬新さに由来するものであり、本論文の有する学術的価値を下げるに至るものではないと認める。口頭試問では、上記諸点についての指摘を受けた学位申請者は、論文中に残る記述上の瑕疵や論証過程での不足な点を認識しており、論考の精度を上げていく意欲と改善の方向性を示した。本論文に見られたオリジナリティに富む学術的探索は新たな探索を呼び、学位申請者のこれからの研究においてさらに高度な研究成果へと改善されていくことが大いに期待される。以上の認識を踏まえ、本審査委員会は全員一致で学位申請者に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。